

連載

宇宙を観じる生活を！（２）

～黄華堂通信より～

黄華堂（代表 有本 淳一、メルマガ編集長 森谷 友由希）

「子どもたちに本物の星空を！」をモットーに関西を中心に観望会などの活動をしているボランティアグループ、黄華等が配信しているメルマガジン、『黄華堂通信』。星空案内、天文に関する絵本の紹介から研究従事者による研究紹介、はたまたクイズやメンバーの天文ルーツを辿る話題と、いろいろな話題を提供しています。ここでは連載でメルマガの話題をごくごく一部ですが紹介しています。今月はいろいろなルーツを辿る記事を紹介します。

1. ホシノキラク ～黄華堂メンバーの天文ルーツを辿って

立ち並ぶアパートの間の空き地で組み上げた望遠鏡を覗いている、そんな光景が私の中で一番古い宇宙に関係する記憶のように思えます。

かれこれ 20 年以上も前、当時小学生だった私は、望遠鏡を買ってもらったという同級生に、その望遠鏡を覗かせてもらいました。場所は広島市内、望遠鏡は 10 センチにも満たない口径でしたが、その時に眺めた月の表面があまりにも美しく、ただただ興奮して、いつまでも眺めていました。

その美しさは、私の興味を宇宙に向けるのに十分でした。

その頃から、田舎へ帰省した時、夜空に浮かぶ星座の大きさ、星の美しさにも目を向けるようになっていきました。

そしてそれは、大学の教員になった今でも、強く印象に残っています。

中学生なりに、高校生なりに、そして大学

生なりに、違う分野に寄り道もしましたが、結局は天文学に戻ってきました。研究は、月までの距離とは比べ物にならないくらい遠い天体を対象にしていますが、折に触れ、夜空を眺めるたび、あの小学生の時の記憶がよみがえります。

昨年度から、職場である大学の天文台が本格的に稼働を始めました。小学生当時とは比べ物にならないくらい大きな望遠鏡で、惑星、星団、星雲、銀河、様々な天体を覗いてみましたが、一番美しかったのはやはり月でした。

いつか月の研究してみるかな…

（米原厚憲、黄華堂通信 2011 年 5 月号より）

2. 安倍清明は天文学者だった ～日本の天文学の源流をたずねて

みなさんは、安倍清明という人物をご存知でしょうか？

夢枕獏の小説『陰陽師』をはじめ、数多く小説や漫画、映画が制作されて、一大ブームを巻き起こしたので、多くの人たちにその名を知られているのではないのでしょうか？

それらの作中で描かれていた清明は、陰陽道の秘儀を駆使して怨霊たちと闘う、平安時代にあらわれた無敵の超人というイメージでした。

ところで、その安倍清明が「実は天文学者だった」と言ったら、意外と思われる方もおられるでしょう。ただ天文学者といっても、現代の天文学者とは行なっていたことや役割は大きく異なっていました。

清明が行なっていた天文学は『天文道』と呼ばれていて、「天に現れたさまざまな天文現

象を観測して記録し、それらが地上にどのような影響を及ぼすのかを解釈する」というものでした。すなわち『天文道』とは天変占星術と呼ばれるもののひとつだったのです。平安時代の日本の天文学は占星術だった…。そう言われると、ずいぶん不思議な感じがしますね。

(株本訓久、黄華堂通信 2008年10月号より)

3. 超新星と私たちのカラダ ～あなたの知らない宇宙

『超新星』という言葉聞いたことがあるでしょうか？額面どおりに読むと、『超・新しい星☆』(笑)。そうです。夜空にいきなり明るい星が現れる現象です。

このような超・新しい星は様々な国で吉凶の前兆とされ記録されてきました。有名どころでは、天文学者チコ・ブラーエやヨハネス・ケプラーが記録した超新星が挙げられます。日本でも、鎌倉時代初期の歌人である藤原定家が著書『名月記』の中に「一條院寛弘三年 四月二日 葵西 夜以降 騎官中有大客星如けい惑」と記しています。これは「西暦 1006年 5月 1日のこと、騎官(おおかみ座付近)の方向にとっても明るい客星(=超新星)が現われた。けい惑(=火星)のように明るかった。」という意味です。

しかしこの超新星、一体何者なのでしょう？答えを言ってしまうと『星が死んだ瞬間の姿』です。星が死ぬのか！？と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、始まりがあるものには終わりがあるものです。太陽のように光っている星(=恒星)の中でも特別重いもの(太陽の8倍以上の重さ)のものは、その一生の終わりに“ぐしゅっ”とつぶれて、挙句、“ばっこーん”と大バクハツするのです。(注意：他にも2つの星がお互いの周りをく

るくる回って最後に“ばっこーん”といくものもあります。)

さてこの超新星はバクハツした瞬間にもものすごく明るくなって、そして普通は数十日で暗くなってしまいます。ではこれで終わりかと言われると、そんなことはナイ。大爆発のあと、超新星は秒速数 1000km というとてもない速度で膨らみながら、周りの物質をあたためていきます。例えば先ほど紹介した定家の超新星は爆発から 1000年の時を経て、現在温度 1000万度、大きさ 50光年もの巨大火の玉に膨れ上がっていることが、日本の X線天文衛星『すざく』によってとらえられています。

更に面白いことに、宇宙に存在する重元素の中で鉄より重いもの(金、銀、銅、プラチナ…)は超新星爆発を通じてしか作れないことが分かっています。地球、そして我々のカラダの中にこれらの元素が含まれているということは、私たちは超新星の残りかす(=星のカケラ)から作られたんだ、ということなのです。星と私たちがこんなところで繋がるのは壮大な話ですね。

(小澤碧、黄華堂通信 2008年12月号より)

森谷 友由希